

宮崎の旧石器時代

—東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果から—

宮崎県庁文化財課

松本
茂

目次

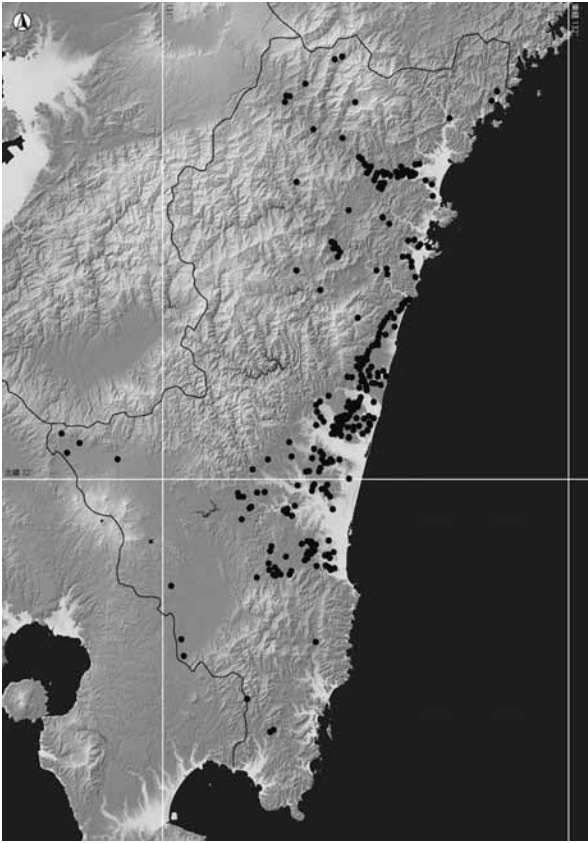
- 一 宮崎における人類史のはじまり
- 二 アフリカから宮崎へ
- 三 ホモ・サピエンス到達以前の宮崎
- 四 宮崎最古の住人は誰だったか？
- 五 旧石器時代の気候と動・植物
- 六 石器のかたちとその移り変わり
- 七 遺跡を残した人びとの暮らし

一 宮崎における人類史のはじまり

旧石器時代という時代を、学校教育において詳しく教えることはほとんどないが、私たち人類が誕生して以来、その歴史が展開した大半の時間はこの時代にふくまれる。宮崎も例外ではない。

今日までの考古学的成果によれば、宮崎では二五〇箇所以上の旧石器時代遺跡が確認されている(第一図)。旧石器時代の存続時間は少なくとも二万年におよぶことから、ひとつの遺跡に幾時期もの旧石器時代の石器群が層をなして発見されることも多い。それぞれの石器群が出土した地層を「文化層」という概念で呼ぶことがあるが、宮崎ではこれが六二三層以上に達する(日本旧石器学会二〇一〇)。

こうした資料の蓄積に、東九州自動車道建設に伴って実施され



第1図 宮崎県における旧石器時代遺跡の分布
(日本旧石器学会 2010 を改変)

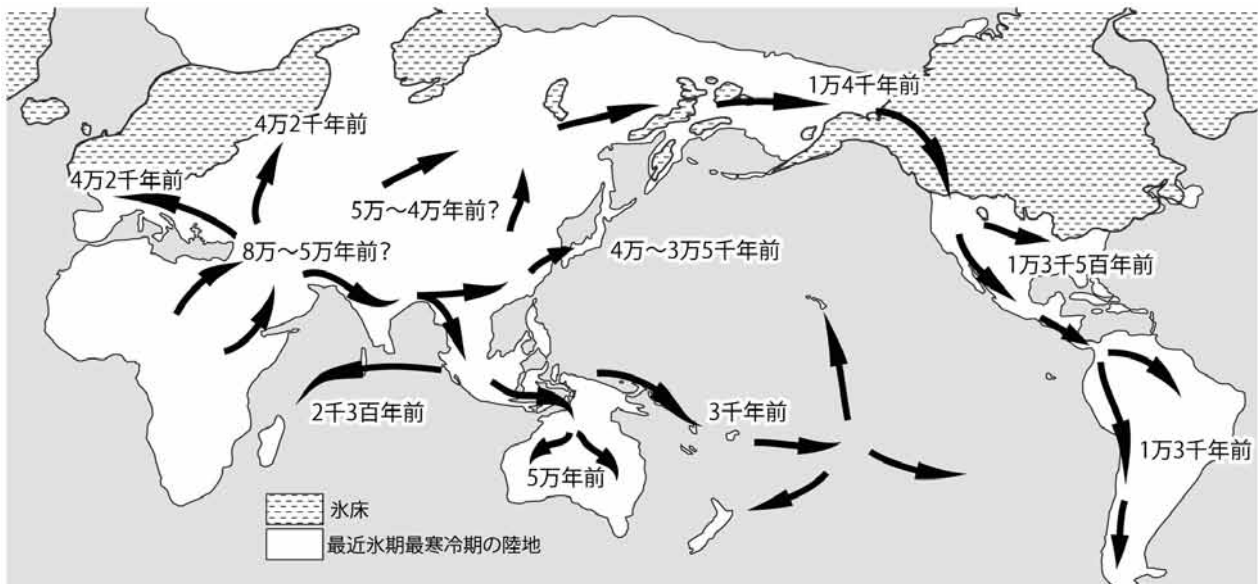
た発掘調査が果たした役割は大きい。全長一三六キロメートルにわたり宮崎県域を南北に走る建設計画にもなつて、一九九五～二〇一三年までに九〇箇所ほどの旧石器時代遺跡が発見される結果となつた。宮崎の旧石器時代遺跡全体のじつに四割程度が、高速道路建設を契機として追加されたことになる。さらに、宮崎県内の各市町村教育委員会や大学による発掘調査もあわせると、最近の二〇年間で、この時代に関する情報は飛躍的に増加したといつてよい。

ここでは、東九州自動車道建設に伴う発掘調査で明らかとなった成果・知見を中心に、宮崎の旧石器時代研究の現状を紹介し、その時代に生きた人々の実像に迫る手立てとしたい。

二 アフリカから宮崎へ

現代の宮崎に暮らす私たちのルーツは究極的には、どこに求められるのだろうか。背筋を伸ばし、二本脚で歩く霊長類の出現を契機に人類の歴史が始まったと定義すれば、それはおよそ七〇〇万年前のアフリカにいきつく。遠い彼の地で産声をあげたサヘラントロプス・チャデンシスから、気の遠くなるような長い道程を経て、やがてホモ・サピエンスへと進化した人類が、現在「宮崎」と呼ばれる土地に辿りつくまでには、どのような物語があったのだろうか。昨今の人類史研究の分野では、少なくともそのあらすじが判明するまでに進展があった。それをもとにすれば、次のようなシナリオを描くことができる(ロバーツ二〇一二、海部二〇〇五)。

およそ二五～二〇万年前のアフリカで、原人から旧人を経て新人へと進化した集団がいた。現生人類であるホモ・サピエンスの登場である。彼らはその揺籃期をアフリカ大陸で過ごしたのち、一三～一〇万年前ごろに、最初の出アフリカを試みたらしい。その痕跡が、



第2図 グレート・ジャーニー（ホモ・サピエンスによる第二次「出アフリカ」）の軌跡
（海部 2005 をもとに作成）

現在のイスラエルにあるスフールとカフゼーという二つの洞窟遺跡から発見されている。しかし、この人類集団は長く存続することはなく、その先に広がるユーラシア大陸への移住には至らなかった。私たちの遠い祖先が、地球上のありとあらゆる土地へと進出するのは、およそ八五万年前まで待たねばならなかった。二度目の出アフリカを果たし、グレート・ジャーニーとも呼ばれる拡散過程に入った現生人類は、ユーラシア大陸に先住した旧人たちと出会い、オーストラリア大陸に到達す

る過程では、原人やその末裔（ホモ・フローレンシエンス）とも邂逅したらしい。そして、およそ四万〜三万五千年前に、ついに日本列島に辿りついたのである（第二図）。

三 ホモ・サピエンス到達以前の宮崎

現生人類のその後の物語を続けるまえに、少し立ち止まって考えるべき問題がひとつある。現生人類がユーラシアの東端に足を踏み入れたとき、そこは太古の動物たちの楽園だったのだろうか？ それともすでに先住する他の人類がいたのだろうか？

近年の形質人類学や分子人類学の成果はめざましく、まさしく日進月歩の感がある。古くから論争のあったネアンデルタール人の分類学上の位置づけについても、「ホモ・サピエンス・ネアンデルタールレンシス」として、ホモ・サピエンスの下位分類と捉える説が提出されたかと思えば、やはり私たちとは別種としてサピエンス（ラテン語で「賢い」の意味）の語をとり除かれ、「ホモ・ネアンデルタールレンシス」に戻されるなど、評価が二転三転している。二〇〇九年にBBCで放送され、書籍化もされた『The Incredible Human Journey』『人類二〇万年 遙かなる旅路』（ロバート・ニール）では、DNA解析の結果からも彼らと私たちとの間に血の交換はなかったとの見方を紹介していた。その大きな根拠は、ドイツのマックス・プランク進化人類学研究所のスバンテ・ペーボらによるネアンデルタール人の化石から抽出したミトコンドリアDNAの解析結果にあった。一九九〇年代後半以降の研究では、新人と旧人の間に交配があった証拠は見出されなかったのだ。

ところがごく最近になって、再び風向きが変わった。二〇一〇年に発表されたペーボらの研究では、クロアチアで出土したネアンデ

ルタール人の化石のDNA解析から、私たち現生人類の一部にネアンデルタール人に由来するゲノムが含まれていることが明らかにされたのだ。アフリカ人の遺伝子配列にはこのゲノムが認められないため、ペーボらは両者が中東で共存した八万〜五万年前頃に交配があった可能性を示唆している。さらに驚くべきことに、シベリアのデニソワ洞窟で発見された約四万年前の人類に残留したミトコンドリアDNAの解析から、この人類集団（デニソワ人）に由来するゲノムが、メラネシアやオーストラリアなどの地域の現生人類に受け継がれていることが明らかとなった（ハマリーニ二〇一三）。すなわち、数年前の人類学的常識をくつがえし、私たちの祖先は過去数万年前まで、他の人類種と生息環境を共有し、かつ交配する機会もときには持ったことが明らかとなったのである。

こうした旧人との交配の証拠は、これまでのところに日本人を含む東アジア地域の現生人類の遺伝子配列からは見つからない。また日本列島では四万年前を遡ることが確実な旧石器時代遺跡の存否については、いまだ評価が定まっていない（堤二〇〇九）。九州でも、大分県早水台遺跡や熊本県大野遺跡群がその候補に挙がっているが、コンセンサスを得るまでには至っていないのが現状だ。

四 宮崎最古の住人は誰だったか？

宮崎県でも、古くは日之影町出羽岩陰や、最近では川南町後牟田遺跡において、後期旧石器時代を遡る可能性がある石器群の存在が指摘されてきた。ここでは、石器群が重層的に出土し、地層中に複数の火山灰が検出された後牟田遺跡の事例を検討しておきたい（後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会二〇〇二）。

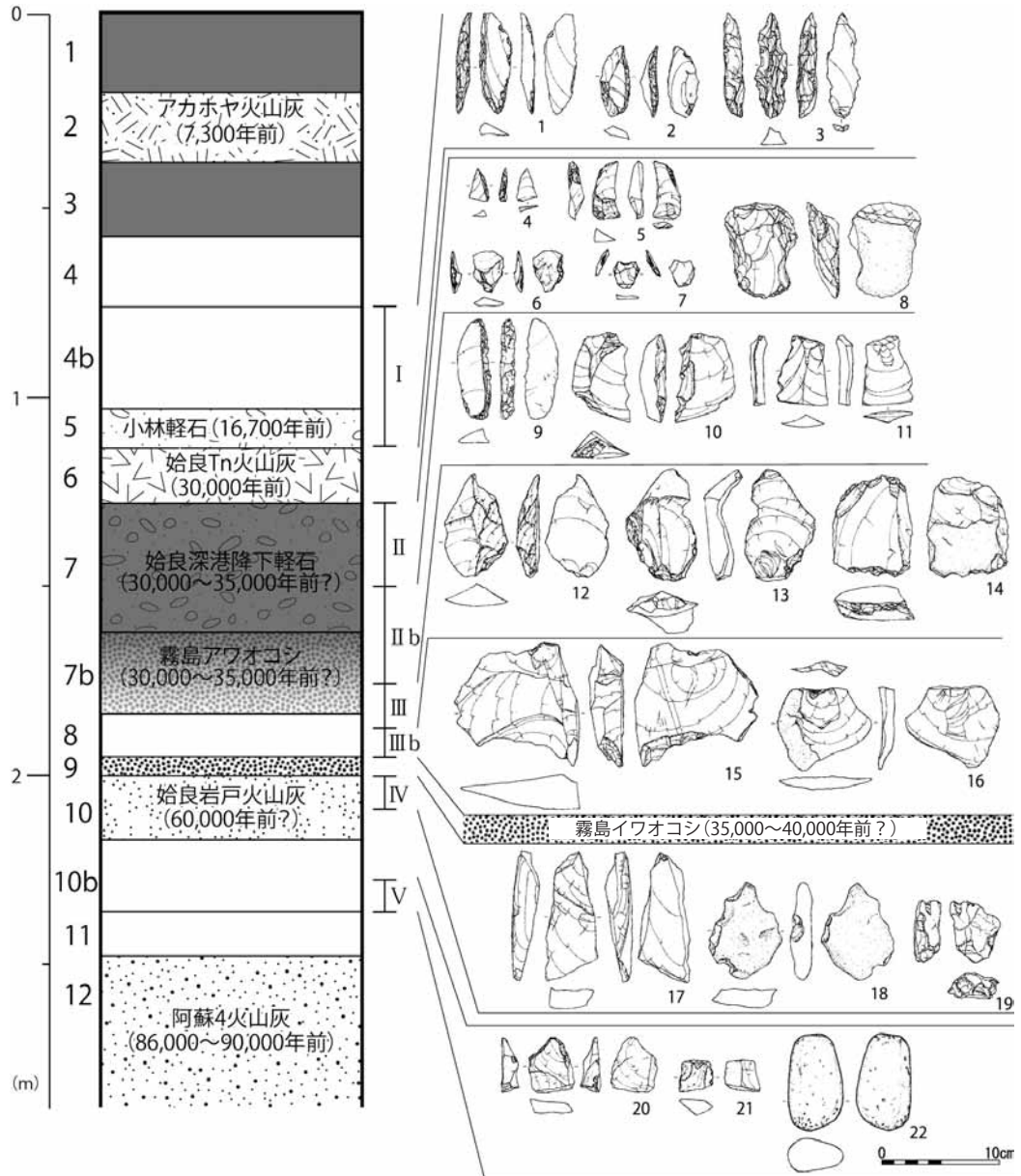
後牟田遺跡では、現在の地表面から最下層まで十二枚の地層が確

認され、第Ⅰ〜Ⅴの文化層が設定された（第三図）。このうち、第Ⅰ〜Ⅲb文化層までは、東九州自動車道建設に伴う他の遺跡の発掘調査からも対比可能な石器群が複数例確認されている。したがって宮崎最古の石器群の候補として追究が必要なのは第Ⅳ・Ⅴ文化層の石器群ということになる。両石器群が出土したのは第九層の霧島イワオコシ（Kr-Iw）の下位であった。

Kr-Iwの降下年代については、自然科学的見地から複数の見解が提出されている。早田勉らが採用した奥野充らの研究では五万年前と古く見積もる（奥野ほか二〇〇〇）。また報告書所収の杉山真二による植物珪酸体分析では、Kr-Iw前後の地層がその後と比較して相対的に温暖な気候を示すことから、酸素同位体ステージ3に比定し、その年代を四万年前に近いところと推定する（杉山二〇〇二）。長友恒人らによるルミネッセンス法によるテフラの年代測定では、他遺跡の測定事例も含めて、およそ三万七千〜三万五千年前の年代値を提示する（長友ほか二〇〇二）。いっぽうKr-Iw下位にあたる第一〇層上部検出の炭化物を試料とした放射性炭素年代測定では三〇二九〇±二〇〇BPの結果が出た。これをオンラインで利用可能な較正曲線であるCalPal-2007Huluを用いて較正すると、三三四四五±一六九calBPの結果が得られる。すなわち約三万五千年前ということになる。ただしこの試料について、報告者のひとりである佐藤宏之は第八層上面の第Ⅲ文化層の所産である可能性について指摘している（佐藤二〇〇二）。

こうして複数の方法から求められたKr-Iwの推定年代値を並べてみると、およそ四万〜三万五千年前にほとんどが収まることがわかる。奥野らの五万年前という推定は、他と比較して古すぎる感がある。Kr-Iwの年代に関してこのような理解が適切だとすれば、少なくとも第Ⅳ文化層の石器群を残したのは現生人類と考えて年代的に矛盾はない。佐藤は、第Ⅳ文化層の年代を四万五千〜四万年前と考

え、第V文化層を阿蘇四火山灰の年代を考慮して八万九千〜四万年
前と位置づけている（佐藤前掲）。第IV文化層についてはおおむね
適当な評価であり、第V文化層に關してもその最新値は許容できる
評価といえよう。



第3図 川南町後牟田遺跡の基本層序と出土した考古資料
(後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会 2002 をもとに作成)

資料を実見する機会を持った。その結果、第IV文化層の一部の資料
(第三図一七の「折断剥片」)については人工品と捉えられるが、他
の尾鈴山酸性岩類製の「礫塊石器」や軟質砂岩製の「剥片石器」な
ど(第三図一八〜二二)、第IV・V文化層の資料の大半は、即座に

さらに検討を進めて、第IV・V石器群を構成する石器自体の評価についても触れねばならない(第三図一七〜二二)。仮に第IV・V文化層の資料を積極的に人工品と評価し、帰属年代を四万五千〜四万年前と位置づけるとすれば、候補となる製作者は二つ考えられる。ひとつめは、第V文化層の年代を古くとも四万五千年以降と位置づけて、ホモ・サピエンスの宮崎への到達を一万〜五千年ほど古く見積もる案である。いまひとつは、第V文化層石器群の年代をより古く見積もることも含め、ホモ・サピエンスに先行して宮崎に到達していた人類の所産と考える案である。後者の見解については、中国および朝鮮半島まで原人ないし旧人によって製作された可能性が高い前期・中期旧石器時代の石器群が確認されていることを考慮すれば、今後日本列島でも同時期の類例が発見される可能性がないわけではない。とすれば、現生人類であれ、旧人以前の人類であれ、後牟田遺跡の Lower 下位の資料こそが、宮崎最古の住人の手によるものとの評価が可能なのだろうか。

人工品と断定できる根拠に乏しいとの見解に至った。すなわち、第Ⅲb文化層以降との断絶が著しいのである。これらの、いわばグレイゾーンに含まれる資料群のうち、「礫塊石器」とされる資料については、一部の面にのみ磨耗が激しい部分が観察されるなど、無視できない観察所見も得ているが、いずれ第Ⅲ・Ⅲb文化層の石器群との比較作業も含めて、再検討する機会を持ちたい。ここで後牟田遺跡における第Ⅳ・Ⅴ文化層の資料を肯定的に評価し、宮崎最古の住人の所産と考えることは、現段階では差し控えたい。

石器群の特徴からしても、推定される年代からしても―その技術的特徴を中期旧石器時代的と捉えるか、後期旧石器時代的と捉えるかは別にして―第Ⅲ・Ⅲb文化層の石器群はホモ・サピエンスが作った石器だと考えて差し支えないだろう。そしてこれと同時に期の石器群は、宮崎県内でも複数が確認されている。したがって、確実な人工品から構成される宮崎最古の石器群と評価できるのは、いまのところK1Wが降下した四万〜三万五千年前以降に現生人類が残した



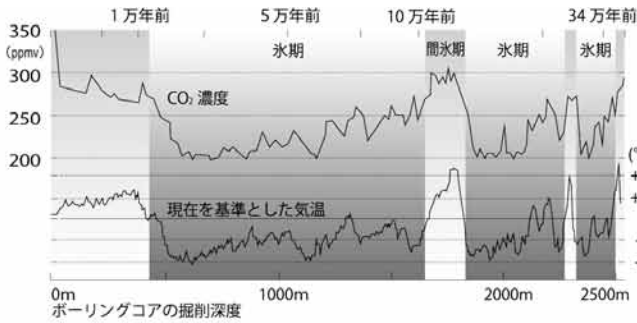
写真1 宮崎最古の住人たちが携えた石器
延岡市山田遺跡ほか出土の礫器・部分磨製石斧
(宮崎県埋蔵文化財センター 2013 から転載)

ものである可能性が高い(写真一)。

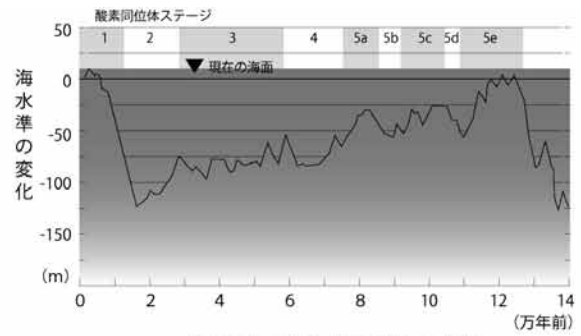
五 旧石器時代の気候と動・植物

これまでの検討で、四万〜三万五千年前ごろに、ホモ・サピエンスの一団が列島にたどり着いたとき、同じホモ属の先住集団がいた可能性はきわめて低いか、あるいははっきりとした証拠を残すほどの人口が定着しなかった可能性が浮かんできた。

人類未到の大地だった宮崎に、最初に足跡を残した現生人類は、いったいどのような気候を体験し、そしてどのような風景を眼にしたのだろうか？ ホモ・サピエンスが日本列島に到達した後期旧石器時代以降だけを考えても、その存続期間は二万〜二万五千年におよぶ。そのあいだ地球の気候も大きく変動した(第四図)。旧石器時代は別名「氷河時代」とも呼ばれ、終始雪と氷に閉ざされた世界を思い浮かべるひとも多いかもしれない。しかし、約二万八千〜二万四千年前の最寒冷期(酸素同位体ステージ二)であっても、冷涼ではあるが乾燥した気候のため、積雪量は少なかったと推定されている。いっぽう、現生人類が宮崎に暮らし始めたと考えられる四万〜三万五千年前ごろは、酸素同位体ステージ三の亜間氷期にあり、相対的な温暖期とされ、冷涼かつ湿潤な気候のため、積雪量が比較的多い気候であったと考えられる。この相対的な温暖期から最寒冷期に向かう気候寒冷化は、おもに植物の花粉分析および珪酸体分析から推定されたものである。ステージ三では、スギ属とブナ属・コナラ亜属などの落葉広葉樹が優勢な植生が一般にみられ、植物珪酸体分析によれば、宮崎を含む九州東南部ではメダケの検出率が高く、種子島周辺では照葉樹林の痕跡も見出される。ステージ二の最寒冷期にはチョウセンゴヨウやトウヒなどの針葉樹とコナラ属



過去34万年間の気候変動



過去 14 万年間の海面変化

近年の調査から後期旧石器時代後半にあたる3万～1万年前までは、きわめて寒冷な気候だったことがわかってきた。

また、現在の二酸化炭素は過去に例がないほど上昇していることがわかる。

2万年前ごろには、100m以上の海面低下が起きた。

第4図 旧石器時代の気候変動
(宮崎県埋蔵文化財センター 2013 から改変)

などの落葉広葉樹が混在する温帯針・広混交林が広がり、内陸の台地には草原植生が分布したことも想定されている。また、九州南部の海岸沿いにはシイ属やカシ属などの照葉樹林も分布していた(杉山二〇一〇)。

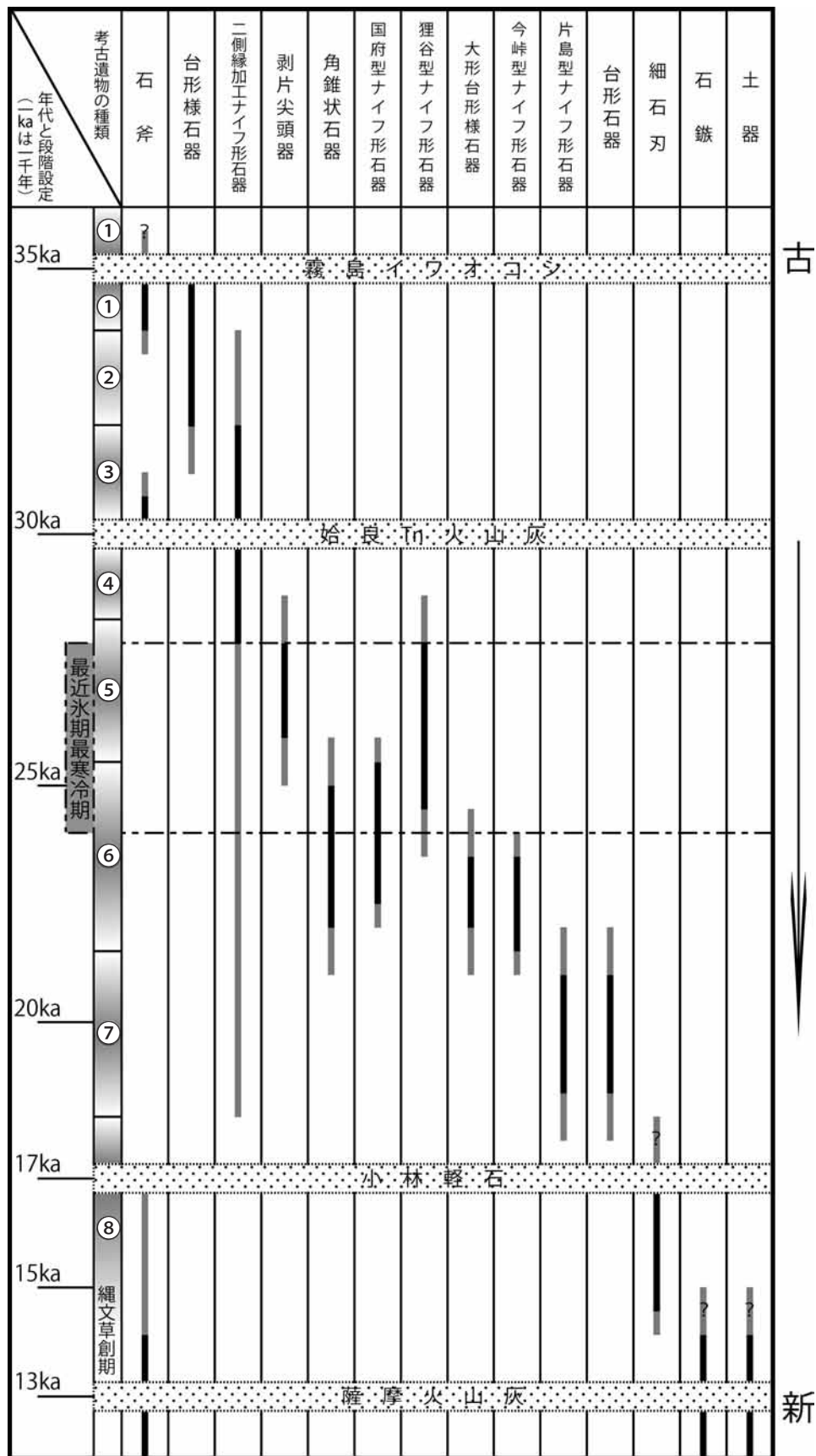
私たちの祖先が獲物として狙ったであろう動物については、どのようなことがわかっていいるのだろうか? 河村善也によれば、ステージ三には、現在では絶滅して列島には生息していないナウマンゾウやヒヨウ、ヘラジカ、バイソンなどがいた証拠がある(河村二〇一〇)。

が、残念ながら宮崎ではステージ三(二)にかけての動

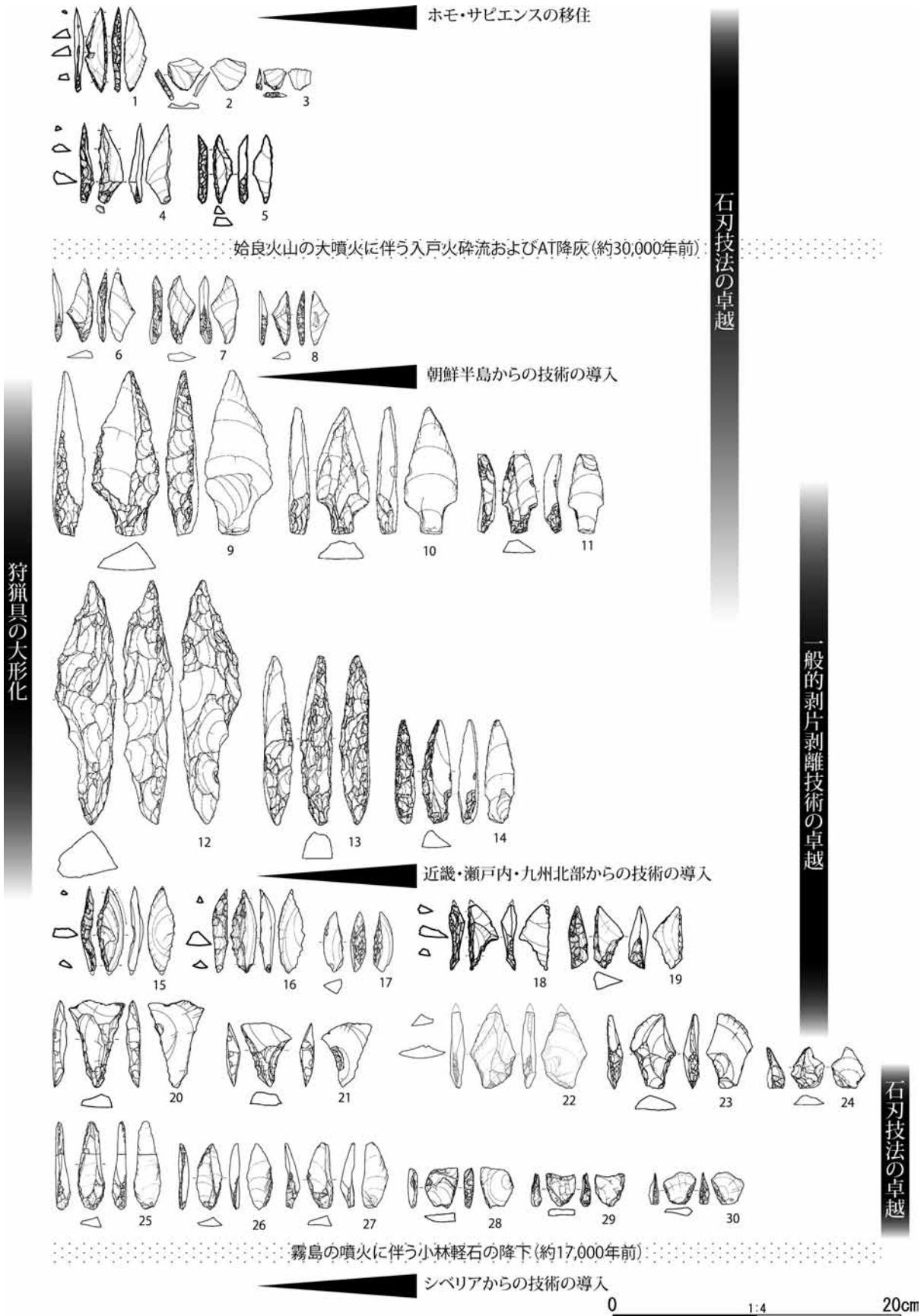
物相ははっきり分かっていない。これより古いステージ四～五の頃に生息したと推定されるナウマンゾウやニホンムカシジカの化石が西都市やえびの市から見つかっているのみである。なお、ゾウやヒヨウなどの大形肉食獣は、列島にホモ・サピエンスが定着して以降、絶滅してしまったが、こうした大形哺乳類の絶滅現象は、オーストラリアでもアメリカでもやや時間差を持って共通して見出される。ポール・マーティンはこの現象を人類による過剰な大形哺乳類狩猟に起因すると考え、Overkill model (過剰狩猟モデル) もしくは Blitzkrieg model (電撃戦モデル) を提案した。大形哺乳類の絶滅の要因としては、他に人類の関与を小さく見積もる気候変動モデルがあり、生息環境の変化に伴い絶滅したとの見方をする。しかし、生態系に占める頂点捕食者の重大な影響をめぐる昨今の議論(ソウルゼンバーク二〇一四)を参照すると、電撃戦モデルもあながち荒唐無稽な説ではないように思える。ソウルゼンバークが挙げる例では、たとえば六年間に四万匹のラッコが姿を消すには、わずか三七頭のシャチが同じ環境にいただけで事足りるのだという。仮に先行して移住した人類が列島にいなかったとすれば、列島に到達した現生人類が見たのはまさしく野生の王国であったにちがいない。そこで、競合して獲物を奪い合う頂点捕食者同士の生存競争があり、しだいに人口を増やし、生息域をひろげた人類が勝利した可能性も考えられるかもしれない。

六 石器のかたちとその移り変わり

相対的な温暖期から人類史上もっとも厳しい最寒冷期を乗り越え、縄文時代を迎えるまでの長い間、宮崎の旧石器時代社会はどのような変遷を遂げたのであろうか。列島の土壌は有機質の残存を許さな



第5図 宮崎地域の旧石器時代～縄文時代草創期における主要遺物の消長



第6図 旧石器時代の宮崎における主な狩猟具の種類とその出現時期

1～5・15・16・18・19・25～27：野首第2遺跡、6～8：春日地区遺跡第2地点、9～14・17・24・28～29：前ノ田村上第2遺跡、20・21：赤木遺跡第8地点、22：矢野原遺跡、23：北牛牧第5遺跡

い酸性であるため、その証拠は、まずは石器の特徴やその残され方などから探ることになる。

東九州自動車道の西都く清武間はちょうど宮崎平野の中心付近を通るルートで、「原（はる）」と呼ばれる台地状の地形に残された遺跡が多く見つかった。これらの遺跡では、幾枚かの火山灰降灰層準に挟まれた複数の地層に分かれて旧石器時代の遺構・遺物が確認されている。これらの石器を、出土した地層とその形態的特徴に基づいて区分すると、数単位の石器群としてまとめることができる。以前に筆者らが提示した変遷案（宮崎県旧石器文化談話会三一〇〇五）では、一〇単位の石器群に細分したが、以来一〇年近い年月が経っており、新たな資料の蓄積も著しく、根本的に見直す時期に来ている。本格的な編年案の構築は今後の宿題としておくが、ここでは仮に八つの段階（松本二〇一四）を設定して、その変遷を追ってみよう。

- ① A T 下位黒色帯最下部から、その下の褐色系土層にかけて検出される石器群。
- ② A T 下位黒色帯の中部から上部にかけて検出される石器群。
- ③ A T 下位黒色帯最上部から検出される石器群。
- ④ A T 直上から検出される石器群。
- ⑤ 剥片尖頭器を含む石器群の盛行期。
- ⑥ 角錐状石器を含む石器群の盛行期。
- ⑦ ナイフ形石器を組成する石器群の終末期。
- ⑧ 細石刃を伴う石器群。

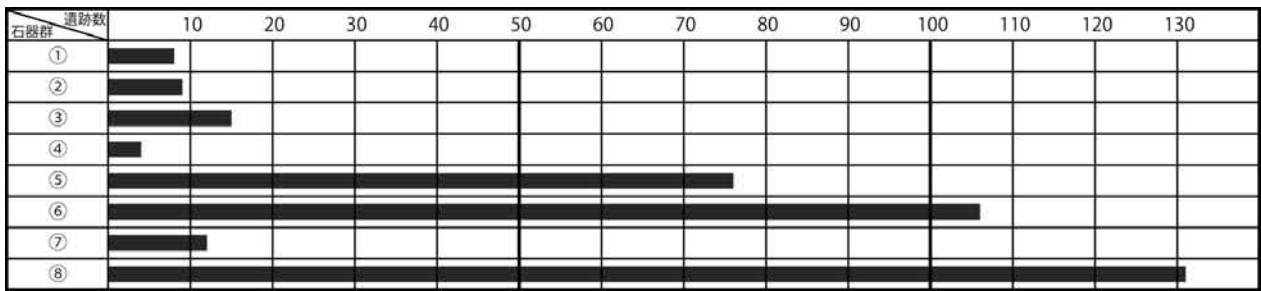
右に示した諸段階は、前半は出土層位に基づき、後半は特徴的な器種の組成を重視することから、統一的な基準で設定されたものではない。これはむしろ理想的な編年段階設定の手法とはいえないが、その理由は、A T 上位における百花繚乱ともいべき石器形態の多様性に主に起因している。A T 下位の①く③およびA T 直上の④に至るまでは、石器群の変遷は単線的で、器種組成も単純である。と

ころが日本史上最初でしかも未曾有の大災害であるA T 降灰の後しばらくすると、それまでにはなかった大形の尖頭器類が出現し、中小形器種もバラエティーに富んで、にわかに複線的な石器群の変遷が見出されるようになるのである（第五・六図）。第五図に示したのはあくまでも、現時点での概念図であるが、各段階の存続期間がA T 下位では平均して二千年程度であるのに対し、A T 上位では平均して三千年以上になる。A T 降灰直後と考えられる④の石器群がごくわずかしみつかっていないことや、片島型ナイフ形石器や小形台形石器を含む⑦の石器群も、⑤や⑥に比べ遺跡数が少ないことを考慮すると、⑤・⑥の石器群はそれぞれ三千年以上継続した可能性さえある。しかし、特に⑥のメルクマールとした角錐状石器に時間的に併行する器種が多いことを考え合わせると、いくらかまだ細分の余地はあるのかもしれない。

以下では①く⑧の石器群について、段階を追って特徴的な石器の出現を中心に簡潔に変遷を述べる。

段階①に該当する遺跡としては、延岡市矢野原遺跡第Ⅰ文化層、延岡市山田遺跡第Ⅰ期、川南町後牟田遺跡第Ⅲ・Ⅲb文化層などが代表として挙げられる。

器種構成上の特徴としては、石斧と台形様石器の存在が特筆される。石斧は全体ではなく、刃の部分を中心にして研磨しているものが多い。これら二つの器種は全国的にもこの時期に特徴的に認められるものであり、ホモ・サピエンスが列島に定着し始めて間もない頃に共通した必需品だったのであろう。その他に地域性をあらわす可能性のある遺物として、山田遺跡や東畦原第一遺跡第Ⅰ文化層の礫器類や、後牟田遺跡、新富町東畦原第二遺跡などで確認されている鋸歯縁石器類などが注目される。また鹿児島県域の指宿市西多羅ヶ迫遺跡で出土した礫塊石器類ほど定型化していないものの、後牟田遺跡では第Ⅲ文化層の尾鈴山酸性岩類製の礫塊石器について、植



第7図 宮崎県域における旧石器時代遺跡数の増減

物加工に用いられた可能性が指摘されている（中村ほか二〇〇二）。

なお、石刃技法について明確な資料は少ないが、矢野原第Ⅰ文化層では石刃が確認されているため、この段階に少なくとも県北では石刃技法が受容された可能性が高い。

石刃技法の要素は、段階②にいたって少しづつ明らかとなるが、この段階の石器群は確認事例が多くない。該当する遺跡として高鍋町野首第二遺跡第Ⅱ期、後牟田遺跡第Ⅱb文化層、宮崎市高岡町高野原遺跡第五地点第Ⅱ文化層などが挙げられる。事例は少ないものの、器種構成としては石刃技法ないしそれに類する縦長剥片剥離技術による素材を用いた二側縁加工のナイフ形石器が登場し、台形様石器も継続して製作される。石斧の製作は途絶える。

段階③では、小形の二側縁加工ナイフ形石器が主流となる。野首第二遺跡第Ⅲ期や後牟田遺跡第Ⅱ文化層では、石斧も確認されているが、いまのところ稀な事例にとどまる。宮崎市高岡町永迫第一遺跡、新富町東畦原第三遺跡などが挙げられる。

およそ三万年前の始良火山の大噴火を挟み、段階④ではサイズがやや大きい傾

向にあるものの、二側縁加工ナイフ形石器と搔器を中心とする器種構成は段階③と共通する。遺跡数が少ないため、存続期間も短い可能性がある（藤木二〇一一など）。宮崎市高岡町耽畔遺跡、新富町春日地区遺跡第二地点などが挙げられる。

段階⑤・⑥では剥片尖頭器、角錐状石器をはじめとして、その他にも多様な種類の石器が製作されるようになる。遺跡数も増加し、特に角錐状石器を伴う遺跡は一〇〇箇所を超える（第七図）。代表的な遺跡として延岡市矢野原遺跡第Ⅱ文化層、延岡市山田遺跡第Ⅲ期、川南町前ノ田村上第二遺跡一・二期などが挙げられる。

段階⑦にいたると、小口型石刃技法から生産される石刃を素材とした基部加工ナイフ形石器や小形の台形石器類が主体となる。層位的出土例はないものの、両者には編年差がある可能性も指摘できる。川南町前ノ田村上第二遺跡三期、高鍋町野首第二遺跡第Ⅵ期などが挙げられる。

以上の変遷について、石器の大きさ、石器の種類、石器製作の技術からもまとめおきたい（第六図）。

まず、石器の大きさに着目すると、段階⑤・⑥を除き、通時的に五〜六センチ以下の長さに収まる狩猟具が優勢であることがわかる。すなわち、段階⑤・⑥にみられる剥片尖頭器や角錐状石器のサイズの大型化は、長い時間軸に置くと例外的な現象なのである。いっぽう従来から指摘されていることだが、段階③と段階⑦には石器の小形化も確認される。

次に器種の変化を追うと、まず段階①における石斧と礫器の存在が注目される。時を経て段階⑧・縄文時代草創期にいたり、再び石斧が製作される。また、段階③以降、段階⑥にいたるまで、搔器が安定的に組成されることも注目される。

石器の製作技術という観点からは、石刃技法のあり方に注意しておく必要がある。石刃技法は段階①以降、徐々に顕在化し、段階③

では主体的な技術となる。段階⑤の剥片尖頭器にも用いられるが、段階⑥では低調となり、段階⑦で再び用いられる。石刃技法が目立たない段階⑥では、一般的剥片剥離技術から生産された剥片を素材として角錐状石器や今峠型ナイフ形石器、大形台形様石器などが製作されるほか、他地域から伝播した瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器の製作も活発になる。外来からの伝播と考えられる技術としては、三つの画期が確認される。すなわち、段階⑤における朝鮮半島からの剥片尖頭器の伝播、さきほど触れた段階⑥における近畿・瀬戸内・北部九州からの瀬戸内技法の伝播、段階⑧におけるシベリアからの細石刃石器群の伝播である。

七 遺跡を残した人びとの暮らし

これまでに述べてきたような遺跡や遺物の変遷は、いったい当時の人びとの生活をどのように反映しているのだろうか？

まず石器のかたちが時代が進むにつれ変化したのは単線的な社会の進化、発達段階を示すわけではないことに注意が必要である。たとえば、石斧は列島への最初の移住者たちが携えていた道具であったが、その後ほとんど作られることはなくなり、旧石器時代が終わりを迎えるところに再び盛んに製作されるようになる。石斧は必要とされる機会があれば作られたし、そうでなければそれを作るための技術は備えていても作られることはなかった。程度の差こそあるが、旧石器時代の石器は、そういう側面を持つているように思われる。第五・六図には示していないが、皮なめしの道具とも推定される搔器が増え、礫群（焼石の集まった遺構）が目立つのは、段階③以降段階⑥あたりまでにその傾向が顕著である。こうした現象は、このころに深まった気候の寒冷化への対処である可能性が高い。

旧石器時代の人びとは、一定の領域を遊動する狩猟採集民であったと考えられ、彼らが残した石器の多くは、周囲の自然環境への適応の結果だと理解できる。第六図に示した多様な石器のかたちの違いのそれぞれに対応する意味を見出すことは、いまのところ困難な課題だが、時間軸上の遺跡数の増減と組み合わせると、大きな流れはつかめるかもしれない。

パイオニアとなった宮崎最古の住人たちは、本格的な寒冷期を迎えるまでの間、石斧を手に周囲の自然に働きかけた。その活動が、樹木の伐採であったのか、ナウマンゾウの解体であったのか、皮なめしであったのかははっきりしない。またときには礫器を必要とする活動もあった。沖繩の出土人骨などが示唆するように、この集団が南方起源であったとすれば、この段階では石刃技法をその技術的レパートリーに持っていなかったかもしれない。

しかし次第に厳しさを増す寒冷期が訪れ、彼らは石材を効率的に消費する石刃技法を採用し、それはその後も継続して用いられる。三万年前には始良火山の大噴火により、南九州の地形は一変したが、被災地域の周辺ではほとんど狩猟採集生活が再開されたい。これに連動するかのよう訪れた最寒冷期には、朝鮮半島で使われていた剥片尖頭器が、九州にもたらされ宮崎でもさかんに作られた。続いて登場した角錐状石器とともに、段階⑤・⑥ではそれまでにない狩猟具が大形化した。またこの時期、遺跡数も大幅に増加している。狩猟具の大形化が直接的にはどのような理由に拠るものなのかは定かではないが、遺跡数が増加したのは人口の増加ではなく、移動回数の増加に起因するものと思われる（松本二〇一四）。つまり、頻繁に移動することで、石器製作やメンテナンスの機会が増え、遺跡として残される活動地点が増加したという解釈である。この移動パターンの変化が、最寒冷期の環境と関連している可能性は高く、積雪量の減少や拡がった草原植生への適応の一環だったとも考えら

れる。さまざまなかたちの狩猟具や、国府型ナイフ形石器に代表される他地域からの人の移動を伴う技術導入なども、適応の一表現形態として理解されよう。また、最寒冷期を過ぎ、相対的な温暖化の過程で、宮崎にも細石刃石器群がもたらされたのは、ホモ・サピエンスによるその後のアメリカ大陸進出と無関係な動きではなかったであろう。

自然環境の変化に、石刃技法と一般的な剥片剥離技術を使い分け、必要とあらば磨製技術も駆使して対応していた宮崎の旧石器人の生活だったが、そこには大きな画期が二度、小さな画期は三度あったといえるかもしれない。大画期の一度めはもちろんグレート・ジャーニーを経た宮崎への移住、二度目は地球規模の最寒冷期が起り、それまでの生活スタイルを大きく変化させた時期である。三度の小画期とは始良火山の大噴火、二度目の大画期に伴う朝鮮半島からの剥片尖頭器の導入、シベリアからの細石刃石器群の到来である。第一の小画期は南九州レベル、第二の小画期は朝鮮半島と九州を包括した地域レベル、第三の小画期はグレート・ジャーニーの完遂に連動した地球規模のものであったと評価できる。

ややもすれば毛皮をまとい極寒の生活に耐えて洞窟で暮らすイメージに終始する旧石器時代だが、そこに暮らした人々が残した石器には、気候変動や環境の変化に伴い、世界規模のホモ・サピエンスの動静にも対応したダイナミックな歴史が刻まれている。

参考文献

アリス・ロバーツ (馬場悠男監訳) 二〇二二 『人類の進化大図鑑』、河出書房新社
アリス・ロバーツ (野中香方子訳) 二〇一三 『人類二〇万年遙かなる旅路』、文藝春秋
ウィリアム・ソウルゼンバーク (野中香方子訳) 二〇一四 『捕食者なき世界』、文

春文庫

後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会 編 二〇〇二 『後牟田遺跡 宮崎県川南町

後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

奥野 充・福島大輔・小林哲夫 二〇〇〇 「南九州のテフロクロノロジー―最近

一〇万年間のテフラ―」『人類史研究』第二号、人類史研究会

海部陽介 二〇〇五 『人類がたどってきた道』、NHKブックス

河村義也 二〇一〇 「更新世の哺乳類」『講座日本の考古学―旧石器時代―上、青木

書店

佐藤宏之 二〇〇二 「後牟田遺跡第Ⅲ文化層の編年的意義と行動論」『後牟田遺跡

宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

杉山真二 二〇〇二 「後牟田遺跡における植物珪酸体分析」『後牟田遺跡 宮崎県川

南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

杉山真二 二〇一〇 「更新世の植生と環境」『講座日本の考古学―旧石器時代―上、

青木書店

堤 隆 二〇〇九 『ビジュアル版 旧石器時代ガイドブック』、新泉社

中村真理・藤本正和・佐藤万里江 二〇〇二 「後牟田遺跡第Ⅲ文化層の礫塊石器類

と遺跡空間の構成」『後牟田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代

の研究』

長友恒人・森 文幸 二〇〇二 「ルミネッセンス法によるテフラの年代測定」『後牟

田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』

日本旧石器学会 二〇一〇 『日本列島の旧石器時代遺跡 日本旧石器(先石器・岩宿)

時代遺跡のデータベース』

藤木 聡 二〇一〇 「入戸火砕流による大災害と片田段階の歴史的特質」『九州旧石

器』第一四号、九州旧石器文化研究会

マイケル・F・ハマー(篠田謙一監修・千葉啓恵訳) 二〇一三 「混血で勝ち残った

人類」『別冊日経サイエンス 化石とゲノムで探る人類の起源と拡散』、日経サイ

エンス社

松本 茂 二〇一〇 「南九州東部・東九州南部における重層遺跡からみた石器群の

変遷」『九州旧石器』第一四号、九州旧石器文化研究会

松本 茂 二〇一四 「九州地方における旧石器時代石器群と遺跡群について」『九州

旧石器』第一八号、九州旧石器文化研究会

宮崎県旧石器文化談話会 二〇〇五 「宮崎県下の旧石器時代概観」『旧石器考古学』

第六六号、旧石器文化談話会

宮崎県埋蔵文化財センター 二〇一三 『みやざき発掘一〇〇年―いにしへの「道」

と交流―』